明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

堺枯川編輯

家庭雜誌

第五號

明治三十六年八月二日發行

清風廬（漫吟）……一
子供の導き……一
細君の說法……六
投書一束……一四
大磯の漁夫の生活　悲しき消息　馴染の下宿屋
小猫の生埋（畫入）……一六
新案四頭立犬車（滑稽畫）……一七
望みと疑ひ（次郎さんの）……一八
苦痛と不平（赤ン坊の）……一九
ウソツキ卯太郎……二〇
夫婦の孰れが多く貞實なるか……二四
世界奇聞……二七
一口ばなし……二八
家庭文庫（「まだ見ぬ親」の梗概）……三〇
匆々一筆……三二

由分社
東京市京橋區新港町一丁目十七番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●本社取次書籍目錄

▲我家の犬猫(堺枯川記) 是れは動物虐待防止會叢書の第一篇で、枯川が幼き頃より今日まで相親んだ犬猫の事を書きしるした者。書入にて、可愛らしく、美くしき本。(定價八錢、郵税二錢)

▲家庭の新風味(堺枯川著) 全六冊定價一圓。郵税八錢。本誌の讀者諸君に對しては、特に本社の志として、奇麗なる赤き表紙の合本として差しあげます。

▲第一冊 家庭の組織　▲第二冊 家庭の事務
▲第三冊 家庭の文學　▲第四冊 家庭の親愛
▲第五冊 家庭の和樂　▲第六冊 家庭の教育

▲家庭夜話(堺枯川編輯) 全三冊定價一圓、郵税十錢。各冊卅五錢。郵税四錢。

▲第一冊 子孫繁昌話 (堺枯川譯述)
▲第二冊 質素儉約の話(加藤眠柳譯述)
▲第三冊 仁慈博愛の話(志津野又郎譯述)

▲枯川隨筆(家庭文學第一篇)定價廿五錢。郵税二錢。

▲言文一致普通文(堺枯川著) 定價廿五錢。郵税二錢。

本社に於て取次販賣を爲す書籍は、本誌の讀者諸君に限りて特に**定價の二割引**にて御求に應ずる事と致します。但(我家の犬猫の外)郵券代用謝絕。

▲定價 一冊六錢、半年分卅二錢、一年分六十錢。
▲郵税 總べて當方持の事。
▲注文 總べて前金の事。
▲郵券にて御送金の場合は總べて一割増の事。
▲前金の切れたる時は帶封を朱書にして御注意致すべきに依り直ちに次の前金御拂込を乞ふ。
▲廣告料 一頁五圓、半頁三圓、特別の場所を指定せらるゝ場合は特別の御相談を致す。

發行所(移轉) 東京市京橋區新港町一丁目十七番地 由分社

大賣捌所
東京神田表神保町 上田屋
東京神田裏神保町 東京堂
東京京橋鍋屋町 良明堂
東京銀座四丁目 東海堂

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

明治三十六年七月廿九日印刷
明治三十六年八月二日發行
發行兼編輯人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七百三十八番地 堺利彥
印刷人 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 森潤二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲本號 は一切理屈をヌキにして、面白きおかしき、床しき。しほらしき、大小さま〴〵の話を集めて編輯した。

家庭雜誌第五號

▲清風盧

空に聳ゆる松の蔭、
隱士ありて盧を結ぶ。
注げよ、火矢を、火の神等。
注げよ、火矢を、雨の如。
暑しと人は悶ゆらん、
苦しと人は叫ぶらん、
只我れ獨りは盧に臥して、
涼しき風を枕とぞする。

▲次號 は毎度讀者諸君より御質問ありたる社會主義の事につきて稍詳細に説明する心組でありますに。

小供の導き

（西洋の或雜誌から反譯したもの）

春坊は今チョコ〳〵と大急で往來を走つて行つた。春坊ことし四つになるが、其の短かい足が眞丸に太つて居るので中々早くは走られぬ。其跡を追ひかけて行く乳母も、是れも隨分太つて居るので、喘ぎ〳〵走つて居る。此日は春坊の爲に大得意の日である。ナゼかと云へば、春坊此日はじめてポッケットのある上衣を着せられたのである。日本で昔風に云へば、始めて袂のある着物を着せられたのである。そこで春坊うれしくて堪らず、**オツカ**さんや女中達に幾度か見せて大自慢をした揚句、今度は外に出て誰かに見せてやりたいと思つて、ウッカリして居た乳母の目を逃れて、今しも走つて行くのである。

春坊は夢中になつて走つて居たが、フト或小さな家の前で立ちどまつた。其家の入口には一人の婦人がボンヤリと立つて居た。春坊はイキナリ其婦人の前に歩

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

み寄つて、
「**オバ**さん、僕は春坊と云ふの。春坊の上衣にはコラこんな善いポッケットが付いてるの。**オバ**さん見て頂戴な。そして**オバ**さん、コン中におカチ入れて頂戴な。エ、**オバ**さん、おカチあるでしよう」
婦人はニコリともせず、六かしい目付をして春坊の顔を見て居たが、
「そんなイヂの汚い事を云ふ者てはありません。間食をするのはお腹の爲に惡いものてす。お菓子、の事かね、おカチ〳〵と云ふのは。お菓子など在つたとて遣りはしません。それよりかサア早くバアヤの所にお歸りなさい」と
嚴しい言葉。春坊はビックリして逃だした。今の今まて光りかゞやいて居た此世界が急に暗くなつてしまつた。ポッケットのある新らしい上衣を着て、皆の者には譽められて、サモ得意てあつた所を、愛嬌のない六かしげな**オバ**さんに叱られて、春坊は殆んど泣きだしそうになつて居る。それてやうやく乳母の所に走つて行くと、乳母は春坊の獨で出て行つたのを叱る筈てあつたけれど、ヒク〳〵と震へて居る其脣を見た時に、叱りどころか慰めるのに骨が折れた。
「オヽよし〳〵。アノ厭な**オバ**さんが春坊を叱つたの。オヽよし〳〵。**バアヤ**が付いて居ますからね、珍田の**オバ**さんなんぞ怖くはありませんよ。アノお人はね、子供の事なんぞ知らないのだから、一こと口を利いてもスグに子供を怖がらせてしまふ。ホントに困つた**オバ**さんですねえ。オヽもうよし〳〵」
春坊は乳母の云ふ事など分りはせぬが、乳母に手を引かれて歩きながら、店に寄つてお菓子を買はうと云ふので、もうイツの間にか怖い**オバ**さんの事など忘れてしまつた。
珍田と呼ばれた婦人は春坊と乳母との後姿を見送つて色々の感じを起こした。乳母が自分の惡口を吐いて居るらしいのは左まで氣にも掛からぬけれど、春坊のアレほど美しかつた笑顔が忽ちに變つたのはドウした譯てあらうか。自分は子供の爲をこそ思うて云つた

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のであるに、其言葉がそれほど恐ろしく聞えたかと、思へば何とやら堪らぬような氣もして來て、ムシャクシャとして內に入り、編物などやりはじめたが、思へば又、ホンに子供は譯の分らぬ、面倒くさい、ぶしつけな、イヂの汚い者ではある。濱田の內では子供を甘く育てると聞いて居たが、知りもせぬ他人に菓子をネダルなどゝ、今少しは躾もありそうなもの。

此珍田孃と云ふは、小兒の敎育について大變嚴重な說を持つて居る人で、其說は誠に立派であるが、自分に子供を持つた事は無いので、其說を應用する機會も無く、說は只どこまでも說だけであつた。それで自分の古い友達は、或は死に、或は遠方に去り、或は結婚してしまふ間に、此人ひとりは色々偏屈な說を貯へて、イツの間にやら年を取つて、謂はゆる老孃と化し去つて、今では此田舍に裏寂しい生活をして居るのである。

珍田老孃は今其のキチンとした小さき居間に坐つて、一心に靴下を編みはじめた。然るに何とした事やら一向に心が編物の上に止まらぬ。どこやらから可愛らしい子供の聲が聞える。イツの頃からか聞いた事も無い柔しい聲の響である。それで編物もうるさくなつて、次の間の食堂に行つて薔薇の植木の枯葉など抓りはじめた。すると又、其薔薇の花の眞中から子供の顏の幻が見えて來る。永く、永く封じられて居た心の奥が此子供の顏の爲に開かれたとても云ふのであらうか。そうすると又それに連れて色々な昔の事が思ひ出される。久しいあいだ忘れはてゝ居た樣々の心持がムラ〳〵と湧いて來る。彼の子の愛らしき目を思ふと同時に、清しかりし昔の人の目元も思ひ浮べられる。其清しき目元に情を含んで其人の我れに向ひし時、思へば短き樂しさであつたるよ。珍田孃は斯く思ひつゝショールを堅く身に引纏うた。やがて其戀人の僞が現はれて、其短かき樂しさの消えた後、孃は全く世に背いて、恨多き哀れの人となり了つたのである。其後、孃は曾て我が愁ひを散じようともせず、寧ろ其愁ひを胸に潛めて、之を養ひ育てゝ居たのである。されば其れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

より久しき今、心は全く冷えきつた(と思ふ)今において、只彼の一人の小兒の爲に、昔の、昔の情ごゝろが忽然として活きかへつたは、實に々々我れながら不思議の思ひがするのである。

翌朝珍田孃は、是れも我れながら不思議な心の働きから、ツイ近處の菓子屋に行つて何やら少しの菓子を買つて來た。そして春坊が又昨日のようにチヨコ〳〵と前の往來に出かけて來た時、孃は我が家の門に寄りそうて、「坊や、チヨイトこゝにお出で」と手招した。

春坊はモウ昨日の事は忘れて居る。孃は菓子を出して春坊に與へた。春坊は大喜びで其れを貰つて居る。孃はサモ遠慮げに春坊の頰に接吻した。

乳母は此の變つた有樣に驚いて、目を丸うして春坊の母親に其次第を告げた。濱田夫人は平生から珍田孃の噂を聞いて氣の毒に思つて居たので、此後とも春坊を珍田さんに遊びにやつても善いと乳母に話した。

それから、毎日々々、春坊が往來に出る度に、珍田孃はイツも門の側に立つて居る。一方は其よろめく足の到る所に愛と光の天地を作る四歲の小兒、一方には其一生涯を寂しさと悲しさとの間に送つて來た四十歲の

老孃、此二人の間にイツか不思議な友情が生じて來た。時々は春坊が此オバさんに招がれて、手を引きあつて庭の芝原を歩く事もある、植木の種々を指ざしては、廻らぬ舌に其名を聞いて喜んで居る事もある。菓子は必ず毎日春坊の爲に用意せられてある。孃の敎育說は元の儘であるけれど、今はそれも力を持たぬと見える。只モウ春坊の來て居る間は嬉しくて樂しくて、歸つた跡は寂しくて悲しくて、又明日の日が待ちに待れる程であつた。

然るに或朝、孃が窓から眺めて居ると、春坊が例の如くチヨコ〳〵とやつて來た。默つて見て居ると、オヤ〳〵門前を通り過ぎる、こちらをば見向きもせずに。そして今日は獨かして跡から乳母の姿も見えぬ。是れはドウした事かと云ふに、春坊二三日前に大通の人形店で兵隊の列をして居る所を見て、それが欲しくて〳〵ならぬけれど、乳母がドウしても買つて與れぬ、それからは春坊の心は只モウ兵隊の事ばかり思うて居る、それで今日は乳母の目を逃れて、自分ひとりでアノ店に行きさへすれば、必ず兵隊が貰へる事と思うてそれでセツセと急いで居るのである。珍田のオバさんの事など今日は全く忘れて居るのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

珍田嬢は春坊が獨りてチヨコ〳〵と行つたのを見て、キツト內の人の知らぬ間に出たのであらうと思ふと、何だか氣遣になつたので、急いで門まで出て見て居ると、春坊は遙の向ふに猶チヨコ〳〵と走つて居る。嬢は何を思ふ暇もなく其まゝ駈けだして跡を追うた。丁度嬢が追ひつからうとした其時、春坊はチヤツとそこに立ち止まつた。何をするかと思へば、向ふ側の店に例の欲しい〳〵と思ふ兵隊の人形の飾つてあるのが目について、脇目もふらず道を横ぎつて行かうとするのである。そこに馬車が駈けて來る、ソレ危い〳〵と云ふ聲がする、馭者は手綱を搔いくつて馬を急に止めうとする、ドタ〳〵バタ〳〵と騷ぎが始まる、春坊は其中に何にも思はずチヨコ〳〵と走つて行く。今にも誰ぞ抱き止めねば、あはれ此蕾の花は蹄の塵と消えねばならぬ。纔に今駈けつけた珍田嬢は、アレ危いと云ふ中にも、さすが暫く躊躇うたが、其暫くの瞬間に、思へば何の樂しみも無い此身、せめて此子に此頃の慰めを得て居るに、若しも此子を失ふならばと、ヒラリと閃く決斷に我身の危さは全く忘れて、其まゝ馬の前に駈けこんで春坊を引んだかへ、逃げる拍子に我が頭を烈しく何かて打たれたと思ふたきり、ラグ〳〵と目が暗んでは其後何んにも知らず。

やつと氣が付いて目を開けば、身は我が家の寢床の上に横たはつて、側には若き婦人が付いて居る。其婦人の顏を見れば、問はずと知れた春坊の母親。珍田嬢はやうやく記臆が戾つて來て、「アノ子は、春坊は無事ですか」と先づ問うた。濱田夫人は嬉し涙に暮れながら、嬢のお蔭で春坊は何事も無く助かつたが、嬢は其時馬に蹴られて、今日で三日と云ふもの人事不省であつた始末を物語つた。嬢は安心したものゝ、それでも春坊の顏を見ぬ中には、まだ何やら氣に掛かると云ふので、夫人は直に春坊を連れて來た。春坊は相變らずの元氣で、イキナリ嬢の寢床に飛びあがり、樣々其時の話をしながら嬢の顏など突ついて居る。嬢は全く例の教育說をも抛つて、そんな事せられても無躾なと叱りもせず、只春坊の手を取つて、「今にオバさんが善くなつたら、春坊と一しよに行つて兵隊の人形を買ひましよね」

全快の後、珍田嬢は濱田夫婦の申出に依り、其寂しき獨住の家を去つて濱田家に引移り、住心地よき一室を借り受けて、絕えず春坊の見舞を受けながら、樂しき日々を送る事となつた。（をはり）

細君の說法

(是れは英國に有名なるミセス、コーダルス、カーテン、レクチュアの中から二三節を拔いたのであります。西洋の細君が御亭主に向つてドンナ說法をして居るか、それを見るのも一興でありましよう。)

(一) 五圓の金を友達に貸したる罪

モシあなた、あなたは中村さんに五圓お貸しなさつたとネ。ヘン、呆れもしない、あなたは有りあまつた金持ですからね。ア、馬鹿らしい、誰が五圓と云ふお金をアナタに貸しますかよ。女房はこんなナリをして、眞黒になつて內で働いて居るのも知らずに。マア考へても御覧なさい、五圓あれば、色々な事が出來るぢやありませんか。それを往來で拾つてでも來たかのように、本當にアナタのような馬鹿はありはしない。私が繻子の帶側を欲しい〳〵と思つて居るのは三年このかたの事ですよ、それも五圓あればチャアンと立派に出來たのぢやありませんか。私はどんなナリをしても善いのでしようよねえ。皆がソウ云ひます、私はアナタ

の女房としてイツでも不似合な身なりをして居るテ。全くソウですもの。それでもアナタには何とも無いのですからね。そして外に出ては友達や何かに善い顏ばかりして。成程、人はアナタの事を氣前が善いとか何とか云ひましようよ。そしてそれが皆家內の者の頭に掛かつて來るのです。

娘達にも帽子を買つてやらねばならぬに、ドコから其お金が轉がつて來ますよ。五圓の半分もあれば買へたのだけれど、モウ仕方が無いから帽子なしで外に出しましようよ。娘だつてヤツパリあなたの子でしようにねえ。

今日は又今日で役人が水道の稅を取りに來ましたよ。だけどもマア考へて御覧なさい、稅なんぞドウして拂つて行かれるものですか、人が貸せとさへ云へば直に五圓も投出してやるような人に。

それから、あなたはマダ御存じあるまいが、今朝源太が寢室の窓硝子を叩きこわしましたよ。私は硝子屋を呼んで直に繕はせて置かうと思つたけれど、五圓も人に貸したと聞いてはソンナ事など仕ては居られません。風の吹込む破れ窓の下に子供を寢せるのは可愛そうだけれど、それもアナタの心柄だから仕方が無い。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

源太は此間から風も引いて居るが、破れた窓の下に寢たなら乾度六かしい病氣になりましようよ。そして死んだら噫あなたは滿足でしようよ。窓なんぞ迚も繕ふ事は出來やしない。

それから又、此次の水曜日には火災保險の掛金をせねばならぬが、どうしてソンナものが拂へるてしようかねえ、アノ五圓があればお釣が來るのだけれど。アヽもう火災保險も駄目になつてしまつた。そして此頃の火事の多いこと、私なんぞ夜つぴて寢られやしない。それてアナタは何とも無いのてすからねえ。氣前の善い人は違つたものだ。女房や子供は燒殺されても友達に金さへ貸して居れば其れて氣が濟むのだから。

アヽ馬鹿らしい〳〵、此夏は鎌倉にても行かれるかと思つて居たのに。淸はアノとほり病身で、ぜひとも海岸の空氣を少し吸はせねばならぬと云ふのに、可愛そうに其れも駄目になつてしまつた。もう〳〵ドッコにも行かれやしない。内にばかり閉ぢこもつて居るのだ。ねえアナタ、そうてすねえ、それが善いのてすねえ。淸はいづれ肺病にてもなりましようよ。私はモウ明らめました、アノ子は死んてしまひますよ。子供を助けるよりは友達に金が貸したいと云ふのだから仕方が無いサ。

アラ〳〵、あなたにはアレが聞えませんか。窓の板戸がガタ〳〵ガタ〳〵と風に扇つて居る。あれも早く直したいと思つたけれどモウ迚も仕方が無い。アラ〳〵煙突の中に煤の落ちる音がする。ナニ、掃除をさせろてすと。掃除も只ては出來ませんからねえ。五圓も棄てゝ歩くようてドウして煙突の掃除まで出來るものてすか。オヤ、鼠が天井を飛びまはる。ナニ鼠ワナを掛けろてすと。鼠ワナも只ては買へませんからねえ。毎日々々五圓づゝも振りまくようてドウして鼠ワナなぞ買へるものてすか。

あゝ〳〵、まだそれから菊も齒醫者に連れて行かねばならぬけれど、それもモウ迚も駄目だ。可愛そうに齒が三本も缺けて、あれが段々惡くなつたらキリヨウも何もメチャ〳〵だ。あれさへ直せばドンナ立派な所にても嫁入が出來るのだけれど、齒の無い娘を貰ひ人なんぞありはしない。あゝ〳〵私達の死んだ跡でアノ子は嘸困る事だらう。それでもアナタには何とも無いのてすからねえ。あゝ〳〵幾ら云つても駄目な事だ。あなたの勝手に五圓ても十圓ても振りまいてお出でなさい。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

△シャツの釦問題

あなた今朝何だつてアンなに怒つたんですよ。オヤ、又此人は口笛を吹くよ。口笛なんぞおよしなさい。あなたは本當に人を馬鹿にしてる。昔はソウでも無かつたのですがねえ、あなたは段々にイケナクなつてしまふ。ナニ、もう寢せて呉れですと。厭です、厭です、寢せるものですか。今より外に話す時はありはしない。マアお聞きなさいよ。タマに私が小言を云ふのぢやありませんか。

あなたマア考へて御覽なさい。只つた一度シャツの釦が取れて居たからとて、何も屋根の飛んで行くほど怒鳴らなくたつて善いてしようにねえ。何ですと、怒鳴りはしなかつたんですと。あなたは自分の怒つてる時には何んにも分らないのですよ。あれが怒鳴つたので無くて外に怒鳴りようがありますかよ。一躰シャツの釦の取れた位が何ですか。ためしにヨソ外の女を女房に持つて見たが善い、あなたの不平がソンナ事で濟むものですか。私は本當に針を手から離した事は無い程ですよ。あなたと子供との爲に私は丸て奴隸になつて居るのですよ。そして私はドンナお禮を貰ふてしよう。馬鹿々々しい、一生に只つた一度シャツの釦が取れて居たからとてスグにお叱りを戴くのだもの。えゝ々々只つた一度ですとも。一度で無くたつて二度か三度ですよ。私くらゐ善く釦に氣を付ける者はありはしないのだから。あゝ惜しい事をした、婚禮前にあなたの持つて居たシャツを取つて置けば善かつたものを。それに釦が付いて居たか居なかつたか見せてあげたかつたものを。

ナニつまらない事があるものですか。あなたはイツでもソンナ事を云つて人を押しつけてしまふ。あなたは自分の怒る時にはサンザ怒鳴つておいて、そして人が何か云へば直に默りこんで聞きもしない。男と云ふ者は本當に勝手なものだ、女くらゐ割に合はない者はありはしない。

あなたの考へでは、女房なんと云ふ者は亭主のシャツの釦の事ばかり考へて居る者と思つてるのでしよう。男はソンナ考へて結婚するのだもの、女の身こそ可愛そうな者ですわねえ。ヤレ釦が取れた、ヤレ何がドウした、斯がドウした、そんなウルサイ事ばかりが女房の役目なら、日本一の男にでも結婚はせぬが増しだ。ナニ、結婚せずにドウするかと云ふのですか。立

派にやつて見せますさ、あなたのような男なんぞ無くたつて支へはしませんよ。

それに私ソウぢや無いかと思ふのですよ。シャツの釦が獨りてに取れたのぢやありますまい。乾度あなたが引ちぎつておいて、そしてアンナ事云ふのでしよう。それに違ひありませんよ、あなたイッても大業に無理を云ふのですもの。一躰そう〳〵釦の取れるのが不思議でならない。私くらゐ釦の事でウルサイ目を見る女は無いのだもの。本當に不思議でならない。

然しモウそれも永い事は無いのだから、私も助かりますよ。私はあなたに責め殺されるに極つてますからね、モウあんまり永く御面倒は掛けません。アラ此人は笑ふよ。笑ひごとですかよ。善ござんす、善ござんす、人が死ぬると云ふのに、タントお笑ひなさいよ。私は何んにも云はずに默つて居るけれど、日に〳〵痩せ細つて行きますよ。今に私が亡くなつたら、どんなにか善い後妻が來て、嘸かし善く釦の世話をする事でしよう。其時になつたらこそ始めて違ひが知れましようよ。其時私の事なんぞ思ひ出したつて何の役にも立ちませんよ。

いゝえ、私やアナタの云ふようなソンナやかましい女ぢやありません。あなたこそヤカマシ屋で、何でも斯ても大業に怒鳴りたてるぢやありませんか。それに若しか私が同じように喋べりたてたら、それこそ大變な事になりますよ。一度あなたにガミ〳〵云ふ女房を持たせて見たい。そしたら違ひが知れるでしよう。ナニもう是れて澤山ですと。馬鹿におしなさい、私がソンナ女ですかよ。

えゝもう、是れからドウしたら善いだらう。あなたは毎日々々ドレもコレも釦を引きちぎる、それを一々付けて居て堪つたものでは無い。私はモウ釦の事なんぞ知りませんよ。あなた釦つけの女でも一人お雇ひなさい。それが善い、それが善い。そしたら私はモウ……

……そーたら私はモウ…………

△傘を人に貸した結果

あなたモウ是れは正月から三本目ですよ、蝙蝠傘を無くするのが。構ふものですかアノ人なんぞ、雨の中に突出してやれば善いのに。濡れて惜しいような物を身に着けて居るぢや無し、構ふもんですか。ナニ、風を引く。アノ人が風を引くなんと云ふ柄ですかよ。アレをお聞きなさい、アノ雨の音をさ、ザア、ザアと窓

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に當つてるぢやありませんか。ナニ、一向に聞えないんてすと。馬鹿におしなさいよ。アノ音の聞えない聾がありますか。此分ぢや屹度五六週間も續きますよ。その間チヨツとも外に出ずに内にばかり居るのですかねえ。オホヽヽヽ、あなたはアノ人が傘を返すとお思ひなさるの。今時、借りた傘を返すような人があるものてすか。私やソンナ事を眞に受けるような馬鹿ぢやありません。アレお聞きなさい、段々烈しく降つて來ますよ。これて六週間も降りつめて、内には傘が一本も無いと來て居る、マア何といふミヂナな事だらう。

　明日から子供はマアどうして學校に行くだらう。此雨の中に傘なしてはやられないし。仕方が無いから私はモウ明らめた。子供には何んにも覺えさせなくて善いのだらうから、幾日ても内にばかり閉ぢこめて置くとしよう。それて大きくなつて何んにも知らなかたらお父さんを怨むが善い。子供の事なんぞチツトも考へないお父さんだもの。

　おゝそれ／＼、私あなたが傘を貸した譯を知つてま

すよ。明日私がオツカさんの所に行く筈なものだから、それてアナタ態と傘を貸したのでしよう。私がオツカさんの所に行くのを邪魔しようと思つて、それてアナタ態と傘を無くしたのでしよう。あなたがソンナ事したつて私行きますよ。雨がバケツを引くりかへすように降つても私行つて見せるから善い。車になんぞ乘るものですか、そんなお錢がドコから出ると思ひます。あなたぢやあるまいし、お錢は使ひあるいて子供は乞食のようにしておく、そして蝙蝠傘は無くしてしまふ。そんな事て家持が出來ますかよ。

　マアお聞きなさい、アノ雨の音を。私これても明日オツカさんの所に行きますよ。雨の中をズクぬれになつて歩いて行つて見せるから善い。私は屹度それて死ぬかも知れませんよ。馬鹿な女てすと。私が馬鹿よりかアナタが幾ら馬鹿てすか。吾妻コートは無し、傘は無し、風を引くに極つてる。それてもアナタは何とも無いてしようよ。お醫者の書付が來てからビックリなさるな。其時はじめて、傘を人に貸すとドンナ損があ

るかアナタにも分るでしよう。

私はアノ晴衣を着て行きますよ、アノ帽子も冠つて行きますよ。そしてそれを皆此雨に濡らしてしまふのですよ。ナニ、着て行かねばならぬ事は無いと。いゝえ私は着て行きますよ。ハイ、私は見苦しいなりをして外に出ることは嫌ひですよ。私が月の中に幾度此家の閾を跨ぐと思ひます。タマに出るには少しは人らしいナリもせねばなりません。オ、善く降る雨だ、窓も何も破れてしまひそうだ。

あゝ〱明日は本當にドウしたら善いだらう。ドウしたらオツカさんの所に行かれるだらう。ダッテ死んでも私行かなきやならない。厭ですよ、人の傘なんぞ借りる事は。若しかアナタが明日ドコからか傘なんぞ持つて來ようものなら、私スグに窓から往來に投げ出して棄てゝしまふからソウお思ひなさい。私自分の傘で無くちや厭、それで無くちや持たない方がヨッポト善い。

そう〱、それにアノ傘はツイ先達て爪金を新しく仕替へて置いたのだつた。馬鹿らしい、爪金まで新しくしておいて人に呉れてしまふ。あなたはそれで善いでしようよ。あなたはそれで安々と眠れるでしようよ。辛抱づよい女房の事や、可愛そうな子供の事は何んにも考へないのだから。あなたはモウ蝙蝠傘を人に貸す事より外、何んにも考へないのだから。

あゝ〱明日行かなかつたらオツカさんが何と思ふだらう。何ですと。幾ら先つき私が行くと云つたからとて、ドウして行かれるものですかよ、此雨に。考へても御覧なさい。行けば少しぐらゐ小使も貰つて來られるのだけれど、傘の無いばつかりに其のお金の貰ひそこなふし。あゝ〱本當にツマラナイ。

子供だつてソウですよ。幾ら何だつて學校にやらずに置けますかよ。降つても濡れても學校にはやりますよ。そして風でも引いて死んでしまつたら、それこそアナタのセイですよ。私本當に子供が死んでしまつても知りませんよ、傘を無くしたのはアナタですもの、私ホントに知りませんよ。善ござんすか、善ござんす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か、私ホントに知りませんよ。アラ〳〵グウ〳〵と鼾をかいて、ホントに憎らしいよ。

△オツカさんと仝居するの説

あなた、今夜はモウお風は少しは善いのですか。明日はもうスッカリお直りでしようね。本當に氣をつけて下さいよ。あなたは平生から弱いのですもの。

今夜はオツカさんが大變に喜んで行きましたね。アラあなたモウおよるの。モウちつと目をあけて入らつしやいよ。オツカさん今夜は本當に喜んで居ましたねえ。ドウだか知らないッて。アラあんな事を。あなた見て居て知れてるぢやありませんか。本當にオツカさんはココに來るとイッてもニコ〳〵して上機嫌なんですもの。柔らかで、滑こくて、手ざわりが善くて、私あんなの繻子機嫌と云ひますわ。そしてオツカさんが又何かにつけてアナタの肩を持つ事と云つたら、それは大變なものですよ。私はイッてもソウ思ふのですよ、あなたが若しかオツカさんの本當の子であつても、今

より上に好きようはありはしまいと。本當ですよアナタ。あなたソウ思ひませんか。よう、返事して下さいよう。ドウだか知れたものぢや無いッて。アラあんな事を。あなた見て居て知れてるぢやありませんか。オツカさんはアナタの喜ぶような事を考へるのが一番の樂みなんですよ。

あなた此前の木曜日の晩の蠣のスチューを覺えて居らつしやるでしよう、大變においしいと仰しやつた。あれは皆オツカさんが拵へたのですよ。「お槇や、今夜は大層寒いから何ぞ暖かい物を拵へておいてあげたら善からう」なんて云ふのですよ。それでアノ晩はアンナ蠣のスチューが出來たのですよ。アラあなたモウおよるの。モウちよつと、五分間だけ起きてゝ下さいな。タマに私がお喋りをするのですもの。

それからアナタのお留守に、上靴が火の側に置いて暖めてゞもあるまい者なら、それはオツカさんが惡く云ひますよ。それは感心ですッて。感心ですとも、オツカさんはイッてもソンナですよ。それに此頃はアナタ

にあげると云つて一生懸命に銀貨入を編んで居ますよ。それがモウ五六ヶ月も前からの事なんですもの、私あなたに内證にしておく約束だつたけれど。マアほんとに嬉しいぢやありませんかねえ。あの惡い目でさ、あの年をしてさ。

　それからオツカさんは又料理が上手でしてねえ。つまらない物でも本當においしくして食べさせますよ。私どうかしてオツカさんのようにしたいと思ふけれど、トツテモ及ぶ事ぢやありません。それやマアやらせて御覧なさい、色んな物を拵へて食べさせますよ。私にや迚もそれが出來ません。それに私や子供の世話に手は取られるし、仕たい／＼とは思つても、迚も料理までは手が屆かないのですもの。アラあなた寐ちや厭ですよ。モウ五分間で善いから聞いて下さいな。

　私ねえ、あなた、此間からソウ思つて居たのですよ、ドウかしてねえ、オツカさんを内に來て居て貰つたらと思つてね。アラあなた寐てらつしやるの。嘘、嘘、ツイ今咳をなさつたぢやありませんか。本當に若しかソウしてオツカさんに來て居て貰つたら、どんなにか便利だらうと私思ふんですよ。そうすればアナタだつて毎晩およる前に暖い物も食べられるし。何てすッて、そんな物は入らないッて。入らないもんですか、あなた體が弱いのですもの。

　それにオツカさんは經濟が上手だからお錢も殘して呉れるだらうし。買物と來たらオツカさんほどの上手は又とありはしませんからね。本當にそれは重寶ですよ。

　それから菓子を拵へる事も上手だし、お酒だつて手作をやるし、ジャムは大變に得意だし、それに縫物は御飯より好で針を離した事は無いと云ふ人ですもの、子供の着物の繕ひなんぞ獨りで引受けて呉れますよ。それにアナタが夜遲くお歸りの時など、どうせアナタはおつきあひもある事だし、おり／＼遲くなるのは其筈ですから、其時などイッまでゞも起きて待つてゝ呉れますよ。そしてそれがアノ人には嬉しくて堪らないのですもの。

　そんなですからねえ、あなた、私どうしてもオツカさんに來て貰ひたいと思ふのですがねえ。イケナイでしようか、え、あなた。あなた、寐てらつしやるのぢや無いでしよう。返事して下さいな。え、善いでしよう、ソウしても善いんでしよう。アラいけないの、いけないのですッて。マア、私どうしよう、マア…………。

●投書一束

▲大磯漁夫の生活

大磯　三洞生

小生は大磯に在りて漁夫の生活を見るにつけ、無教育の下等社會と呼はるゝ人々が、教育ある中流以上の人々よりも確に美しき心を持ち美き行ひを爲し居る事を信す、依て現在見聞せし事實を左に記す。（前略）漁師等は一般の善く和睦して業務上沖にありては口論するも陸來れへは元の通り恨みなどする事更になく、若し沖へ出て海底の磯に網又は繩を引かけ船に歸へりの遲き時などは、誰れ彼れの論なく皆提灯をさげて海岸に居並び其歸途を案じ深更に及ぶも船の來るまで待ちつゝ有り、船の形の見ゆるや忽ち大勢浪に飛出し一同綱に取り付て船揚げし漁師の勞に替りて働き彼れを慰む。此時に於ては姙娠中の女房も、七八才の男兒女兒も、婆さんも、爺さんも、皆寄り集りて和氣藹々として他の眼を喜ばしむるなり。又女の仕事に就ては一方ならぬ多忙を極めて居る。船の來るを見るや、忽ち天秤を肩にして馳け附る女房あり、曲りし腰を延して馳ける老婆あり、夫々力に應じたる丈の船の荷を引下しモッコに乘せて家に運ぶ。帆を日光にさらす、網をほす、夜は十二時には必す起きて嚴かんの夜中を事ともせず喰事の用意を爲し、浪の船まで荷を運び出し、雨天の時には簑笠に天秤提げて來るあり布子の上に單物着たるあり、何れも尻からげ跣足にて山程の荷を力まかせに運ぶさま勇ましく、其言語は男女共に麁末なれども女を打擲するなど荒き事をなす漁師は無く能く妻子を愛し船に就ての事を知る外、漁師は家内の事に就ては一向何も知らず、内事は一般に女房のなすまゝなれど船持の妻なりとて別に遊ぶ事も無く、衿垢の付きたる衣を着て少しも念とせず活計に就て不足など致すものなく其志非常に潔白にして互に隠し會ふ事などなし。斯くも尊き志を持ちつゝ有る漁師及び其妻子が下等社會などゝ輕蔑せらるゝは小生の尤も解せざる處なり。

▲悲しき消息

しんこ

小生の奉公する家の主人は細君は無之候、細君のなき家は丁度火の氣の絶えたる厨に居る樣な心持の致し、冬と云はず秋と云はず殊に雨のふる今日の薄ら寒いジメッポイ日なぞは、一層淋しく思はるべく、已れ十一二歳の頃までは、父母の膝下にあつて樂しき團欒の家庭に育つた事とて、小生はイッも其時代の樂しさを回想すると仝時に、其後家を出てゝ苦學した事、不人情な奴に雇はれてシドイ目に逢うた事なぞ、既往を聯想してはイッも悲觀の念を起すのであつて、それがいかにも意氣地なさゝうに自分ながら思はれ申候、然しそれは餘事にて候へば此位に致し置くべく、即ち主人が外出して居らるゝ時は、仝地位の奉公人計りとなつて、恰も靜な同志打を遣つて居る樣な譯て、其家に取つて爲にならぬは勿論、尚此家には下女上りの、細君の樣な、樣てない樣な、候補者の樣な、樣でない樣な女人あつて、平常生かじりの漢語で奉公人を使ひちらし出入の者にまで細君然とお高く止まり、家政を整理するでも無く、主人なして内顧の憂なからしむるでも無く、一に自己が現在及び老後の安逸を完うすべく汲々たるにつけ、小生は其主人の爲に其者を憎くらしく思ひ居候、以上の次第に候へば此家は終に榮ゆる事なく、花開くと云へども春の暖さを知らず、奉公人一同は所謂働き甲斐なきよりして奉公人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

根性を起し、忠實に勤むるの念慮無く、遂には種々なる不平を稱ふるに至る事と存ぜられ候、餘に煩はしく候間是れにて擱筆仕べく候、先生は斯る殺風景なる、無趣味なる、家庭(と云ひ得べきや否や疑はしけれど)の有様は御存じ無之と存じ誠に結構なる事と羨ましく奉存候頓首

▲馴染の下宿屋

松 籟 庵

僕が學校生涯を終へて故都を辭してから既に四年となつたが、年二回の故都の訪問は僕には實に大いなる樂みである。

故都に着するや、直に訪ふのは出町橋畔の某家である。是れ僕が曾て眠り、食ひ、讀み、書き、考へた處である。今年又例の如くおとづれた時、僕の腦の上には新しい書紙がある。これは正月に家族の人々のと仝時に僕の分として拵へておいたのだと云ふ事であつた。翌朝、目がさめて見れば枕元に齒磨と楊枝が置いてある。是れは學生時代の者であつた。書紙の新調、楊枝の保存、こんな嬉しい事は無い。

僕は此家を訪問する度に、其大いならざる庭園に草花の一株を植える事にして居るが、開花の節には必ず其一片が手紙に封じられて僕の手に届くのである。

僕は此家で鐵槌を取る事もある、障子を張る事もある。箒を持つ事もある。時としては鍬を取る事もある。是れ皆僕が非常なる興味を以つてする事てある。

▲樂しき生活

初音の冬　寒

ヒケヽコ、ホケヽコ、ホヽヽヽケヽコ、

鶯がお座敷の床の間で、まだ雨戸をあけない前から、鳴いて居る。此の鶯は去年小田原とか、三嶋とかで捕へた鶯であつたのを、近所に名鳥が居るので、其れを附親にして三音を充分に聞かせ、お正月なども得意によく鳴くので、父上の秘藏の鶯であつて、名を玉芙蓉と僕が命名したのである。であるから、父上は毎朝起きると、すぐ餌をするので、其のゴロ／＼と云ふ音で僕は目を醒ます。お天氣の時はお庭の掃除は僕の職務なので、庭と云ふても廣い事はないが、庭の割合に木の多いのと、四季花が絶へないのとて聊か誇つて居るのである。松の下が圓形に石て圍まれて居る。其内には妹共が、田甫から取つてきた蓮華や菫が盛りに咲いて居る。はてわお隣の、山吹や梨の花が黄に白になつて、うちの庭へ曲つて咲いて居る。八時半になると、妹を學校へ行くべく、きんちやんが呼びに來る。格子を出て、門を出る迄

昔し昔し其の昔し、爺さんと婆さんがあつたとさ………

と歌ふて行くと、前のお宅の、保ちやんがお得意の

流てき　一せん新ばちな　はやわが　きちやあ　はなへたい

と毎日々々繰り返へされるのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小猫の生理

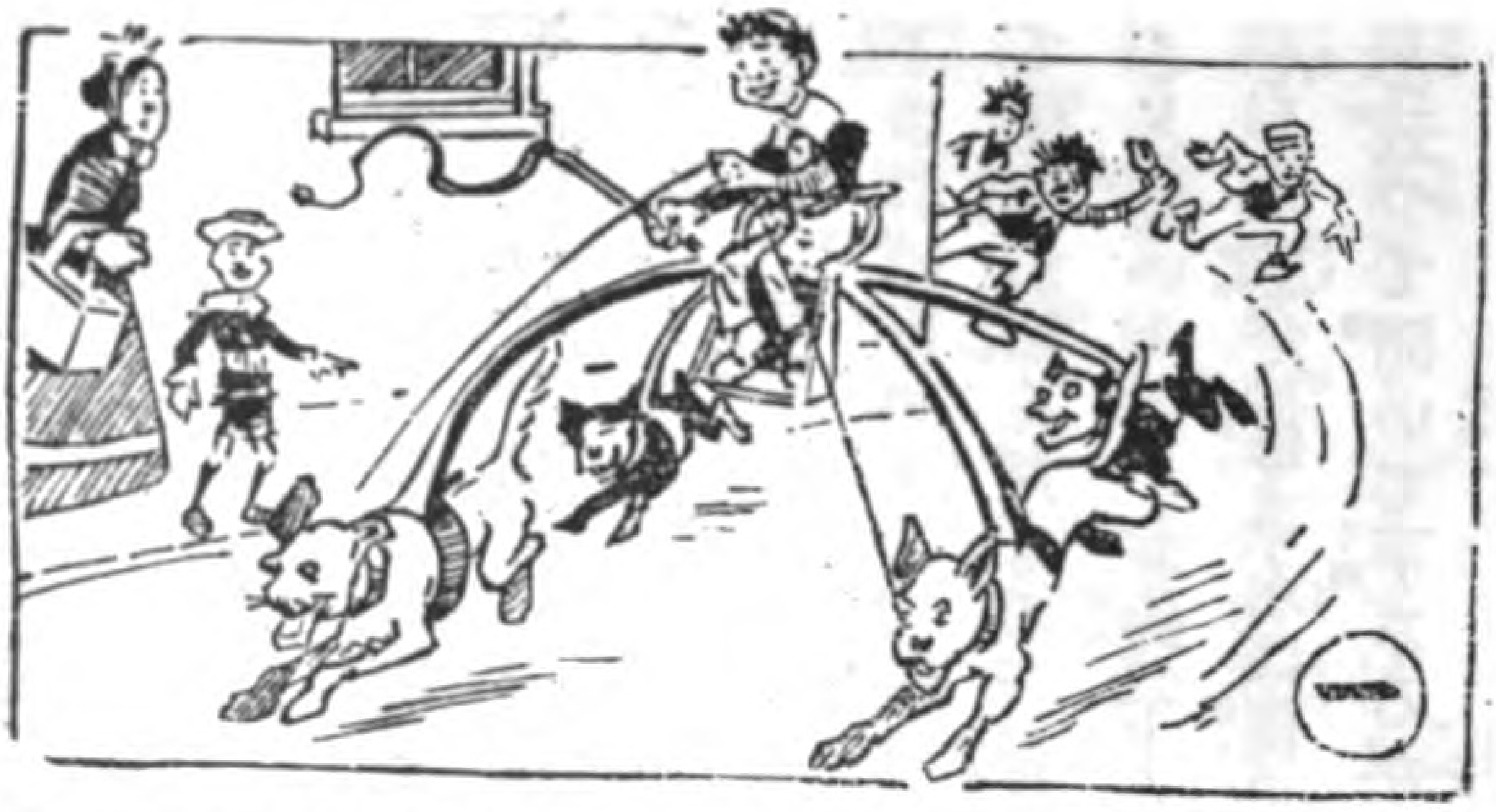
スコツトランドの或る紳士が羊飼に使ふ犬とペルシヤ產の小猫とを飼つて居た。猫も犬も馴れあうてイツも仲よく遊んで居たが、或日、家內の人が態と小猫を可愛がる振をして、犬にはヨソ〳〵しくして見せた所、サア犬が燒餅を起して、大變に不興な顏をして、フイとあちらに行つてしまつた。ドコに行くかと跡をつけて見た所が、裏庭の隅の方に行つて頻りと地に穴を掘つて居る。妙な事をするワイと思つて猶見て居ると、とう〳〵一尺四方ばかりの穴を拵へてしまつた。そして

何をするかと思ふと、又フイとあちらに行つてしまふ。又其跡をつけて見るに、元の所に行つて暫く小猫と遊ぶ樣子であつたが、不意に小猫の首筋を引啣へて、サツサと穴の處に持つて來た。そして小猫を其穴の中に入れて、頻りに廻から土を掛けて居る。察するに是れ嫉妬の餘り小猫を生埋にしようとするのである。それを見た紳士は大ひに驚いて、早速馳けつけて猫を救ひだし、樣々に犬をなだめて、今度は、犬と猫と一しよに菓子など食はして、ヤツトの事で又元の通りの仲よしにしたと云ふお話。

▲云ふまいと思へど今日の暑さかな
▲云ふまいと思へど元の榮華かな
▲云ふまいと思へど人の噂かな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新案四頭立犬車



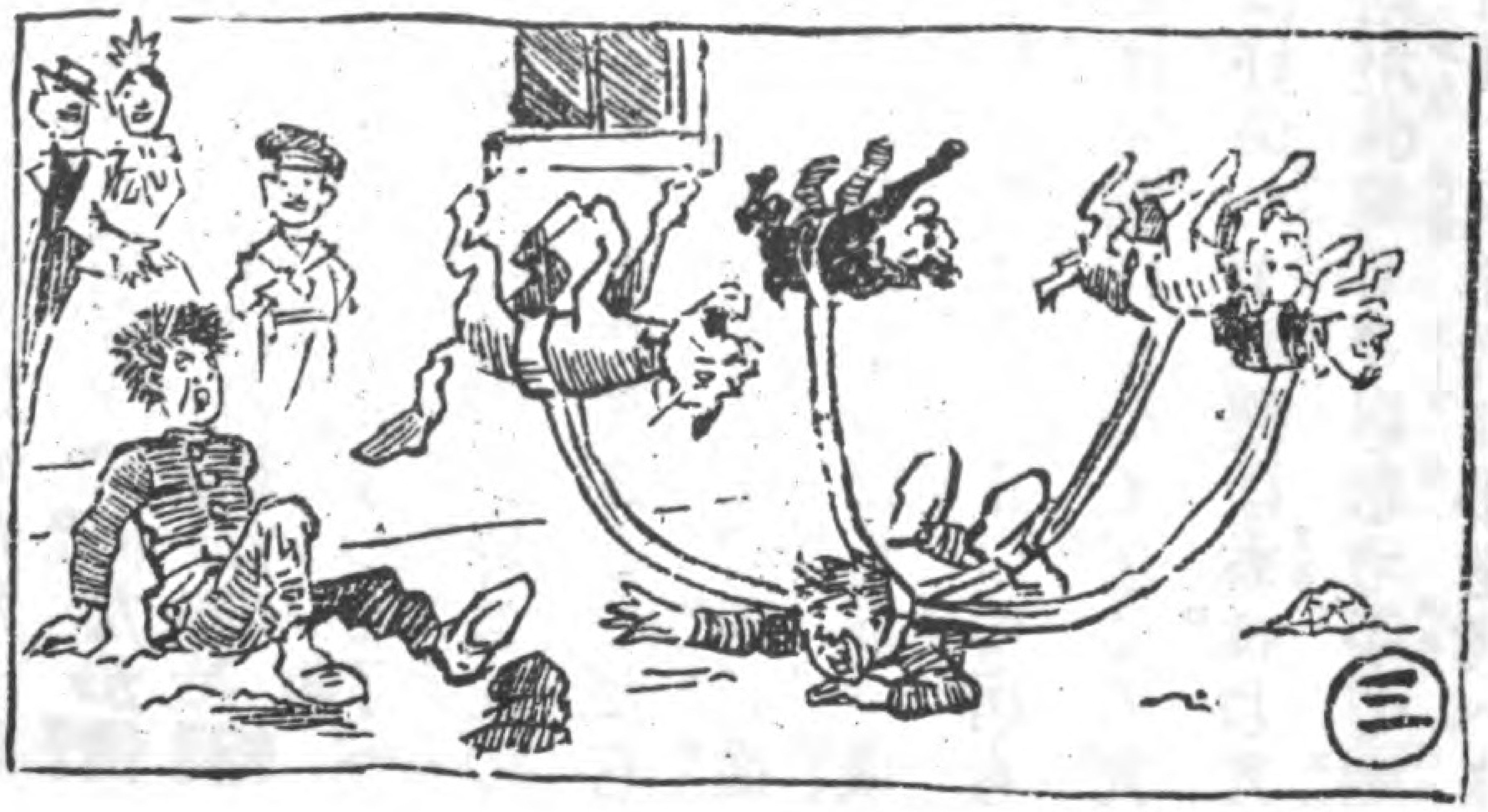
(一)或日凹太郎が新案四頭立の犬車に打乘つて意氣揚々と大道を走らせた。往來の人々はいづれも妙案に感心して、ヤンヤとばかり喝采した。

(二)凹太郎ますます得意で進んで行くと、或町の辻に後に目の無い人間が大手を振つて歩いて居る。犬は何の用捨も無く走つて行く。凹太先生梶を取らうとしても心に任せぬ。アナヤと云ふ中、とうとう犬車は其人にブッつかつた。

(三)其人は不意を打たれてドーと倒れる。それと同時に流石新案の犬車も眞逆樣に引くりかへる。四疋の犬は足を揃へて仰向になつてモガいて居る。凹太先生は車の眞下に押しつけられて唸つて居る。往來の人々は一度にドット吹出して、再び其妙案に感心して、ヤンヤとばかり喝采した。

▲云ふまいと思へど廓言葉かな

▲云ふまいと思へど又も小言かな



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

望みと疑ひ（次郎さんの）

麻多樓主人

母さんが僕にも次郎さん？　樣な、奇麗な、暖かい毛糸の靴下を買つて下されば好いナー、僕のは木綿で冷たいのだもの。僕も護謨靴がほしいナー、アレだとほんとに暖で好いがナー。僕の衣服をモッと短くして下されば好いナー、駈ッコなんかするに足に捲き付いて仕樣が無んだもの。母さんが時々伴れて歩いて下さると好いナー、お鈴(下女の名)なんかと歩くのは僕ほんとに忌だ。母さんは僕の云ふ事は何でも「ハイ〳〵」と云つて聞いて下さるが、直に忘れてお了ひなさるからホントに忌になつて了ふ。母さんが僕の尋ねる事を一々敎へて下さると好のだけれど、「太郎さん、母さんにそんなに五月蠅するのぢやありません」なんて仰るのだもの。母さんは僕が奇麗な花を取らうとすると、皆毒だ毒だと仰るが、僕はホントに忌になつて了ふ。僕は田舍に行つて芝原の上に轉つたり、鷄に餌をやつたりして見たいナー。僕が小さな犬の兒で飛だり跳たりして遊んだら、どんなに面白いだらう、何だか僕は犬の兒になりたくなつた。僕は繻子だの絹だの、縮緬だの大忌いだ、あんな物は世の中から無なつて了へば好いナー。アノ馬車で遊びに來た江間の伯母さんの子供を、母さんは何故あんなにチャホヤなさるのだらう。そして貧乏して困つて居る秀ちやんには、同じ從兄弟だのに何故あんなに忌な顏をなさるのだらう。僕にはホンとに分らない。どうして雲は宙に止つて居られるのだらう、晝間お星さんは何處に行つて居るのだらう、誰れか敎へて呉れゝば好いナー。僕はお日さんの入るアノ高い山に行つて見たいナー、そして手で觸つて見たいナー。僕はモウ自分で困る樣な事を考へるのは止さう、誰も敎へて呉れる人が無いのだもの。僕がお鈴に聞くと、何時でも「坊ッちやん、馬鹿な事を仰るな」と云ふんだもの。僕は馬鹿なのか知ら、お鈴は自分では好く知つて居るのだらうか、母さんは自分の子に何故敎へて下さらぬだらうか。あゝモウ止さう、僕にはチッとも分らないんだもの。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

苦痛と不平（赤ン坊の）

麻多樓主人

私、お乳を飲んでは寢てばかり居るから、何の苦勞も無い樣に見えるてしようが、ほんとに半死半生の苦みをしてるのですよ。毎朝お顏を拭いて頂く時には、鼻が汚ないと云ふては上の方に擦り上げられますし、時には針の刺つた着物を着せられまして、チク／＼刺れる痛さに泣いてばかり居ましても、母さんは、今日は機嫌か惡くて仕樣が無いと、お叱りなさつた揚句に投り出してお置なさる。そして晩にお寢衣と着かへさせて戴く時にヤット痛さを逃れるやうな事もあります。又、一人で晝寢をして居ますと、大きな猫が枕元に坐つて、恐しい眼で上からジッと見下して居る事がありますが、その時の恐しさと云つたら、ホントニ慄へ上つて了ひますのよ。毎晩お母さんは小説をお讀みなさりますが、その時には私をお膝に載せてランプの直ぐ側迄持つてお出なさりますので、私はホントに眩しくて堪りません。それから私が奇麗なボタンの落て居るのを見付けて、折角玩弄物にしやうと思つて居ると、母さんが直に取上げてお了ひなさります。それから母さんは、チョイトと云つてお出なさりますが、そのお湯の長いこと、私はお腹をペコ／＼に空かして待つて居ますが、容易な事ではお歸りなさりませぬ。それからお花見などには、暑いのに身動きも出來ぬ樣に下女の脊に縛りつけられて、日がな一日連れて歩かれます。どうかして母さんが一人でお出かけなさりますと、後に殘つた下女は私を好い玩弄物にして、いろんな事をさせますが、私は何所も彼所も身躰中が痛くなつて了ひます。それから兄さんや姉さん達は私の足をいぢり散して、ホントに堪りませんの。斯の樣に胸の中にはいろんな苦痛があるのですが、何とも口に出して云ふ事は出來ませぬ。それを誰でも一口に子供はうるさい者だなど丶仰ります。世の中に何が苦しいの、詰らぬのと云つて、赤ン坊ほど辛い、詰らぬものが又とありませうか。洒落や戯談では迚も赤ン坊になつては居られませぬ。

ウソツキ卯太郎（ボーソーンの反譯）

加藤眠柳君

ウソツキ卯太郎は莨の行商を營業にしてゐる。渠は**ウソツキ**と綽名されてゐるだけあつて、どんな滿らない話でも其から其へと、根問葉問しなくては心が濟まぬ。そして其話を他へ受賣する場合には、尾を附け鰭を附け針を棒にしたがる癖がある。

渠は今朝も莨の入つてゐる箱車を小い牡馬に牽かせて、**モリスタオン**から三里ばかりある森まで來たが、をりしも坂の上から一人の男が降りてくる。その男は何か重さうなものを肩に擔つて、いたく疲れぬいてゐるやうてはあるが、然も歩調は頗る達者さうに見やられた。察するところ今朝はやく宿を出たのではあるまい。昨夜徹宵歩いて今日も終日歩くといふ了簡らしく想はれる。

饒舌家の**ウソツキ**卯太郎は件の男が近くへ來たとき、「やあ旦那おはやうございます。へゝゝ、大變にお急ぎ

てげすな。まあ一服おやりなさい。何か近來變つた話はありませんかな」と話しかけた。

旅人は凄い眼をぎろりと光らせて、「變つた話？」と卯太郎を目戍つたが、慌忙てゝ其鼠色の帽子の鍔を眼の上まで引下し、「變つた話といふのは――さやう――昨夜の八時前後であつたかな――**キンボールトン**村の比企さんが、菓園で愛蘭人と黑人に殺されたがな、殺した奴等は比企老人の死骸を、彼處の梨の樹の枝へ吊して置いたよ。今朝其死骸を發見けたら駭くことだらうよなあ」

怪しの旅人は是慘劇を語り了るや否や、飛ぶやうに彼方へ行つてしまつた。卯太郎は宛然煙にでも捲かれたやうに、暫時ほんやりと旅人の跡を目送つたが、「いかにも變な奴だ。彼奴昨夜の出來事を、みづから目擊したのでもあるまいに。はゝあ分つた。彼奴日を一日とりちがへて話したのだな。分つた。分つた」

卯太郎は斯ひとり言つて森を出發したが、例の**ウソツキ**だから右の話を、自分で探偵でもしてきたやうに、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼處の旅舍や此處の茶店で、尾を附け鰭を附け針を棒にして話し歩いた。ところが偶然にも以前比企老人の店で、手代を勤めてゐたといふ男に邂逅した。その手代は卯太郎の話を聽き了つて「比企老人は毎日々々日が暮れると、店の賣溜や書類を懷中して、菓園を通つて歸宅するのが常だがね、彼の老人は爪に火を點すシマリ家で、加之に疳癖の強い人物と來てゐるから、到底ろくな死にやうはしまいと思つたよ。へん剛慾爺が死んだらば、**キンボールトン**の學校にゐる爺さんの姪が、そつくり財產を貰ふだらうよ」と冷かに告げて、毫も比企老人の變死を傷む樣子がなかつた。

卯太郎は彼方此方で是話をしたり莨を賣つたりして、その夜は**パアカース**村へ二里許もある但ある旅舍へ宿つた。そして夕餉を終つてから雜談室へ行つて、卷莨を燻らしながら二十名ばかりの人に、得意然としてウソ半分の殺人事件を語つたが、もう是時は尾鰭が十分と附いてゐて、三十分も費さねば話せぬほど長くなつてゐた。

卯太郎が是耳あたらしい椿事を語り了つたとき、一人の農夫らしいのが卯太郎の前へ椅子を牽きずつて來て「大將、おい、君は比企老人が殺されたと言つたね。ヘツ〳〵ウソも休み〳〵にしてくれ。僕は今朝現に老人と酒を飮んで來たのだ。こゝなウソツキめ。ウソも休み〳〵にしろよ」と嘲み笑つた。卯太郎は呆れて卷莨を落し、「へえ――では全然形の無いことでげす歟」と訊ねると、「あたりめへよ」と農夫は苦い顏して室を出て行つた。**ウソツキ**の卯太郎は流石に席にも居たまらなくなつて、いたく悄げて我室へ逃歸るのであつた。

斯くて翌朝卯太郎は彼の農夫に合はせる顏がないので、朝うすぐらいうちに旅舍を出た。そして**サルモン**川を過ぎて進んで行くとき、むかふから何か重さうなものを擔つた男が、てく〳〵と**サルモン**橋の方へ歩いて來る。卯太郎は遽然しく其男を呼とめて、「えゝ唐突ですが貴君は比企老人が黑人等に殺されたのを御存じぢやありません歟」と訊ねた。

訊ねられた男は黑人であつたが、卯太郎に斯う訊ねら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れて吃驚し「比企さんてす歟。いゝえ黒人に絞殺されたんちやありません。殺したのは愛蘭人です。昨夜の八時頃です。私は昨夜七時に彼村を出たから、少しも關係がないのです」

分疏するやうに言ふだけのことを言つて、黒人は弛せ過ぎて了つたのである。卯太郎は益す分らなくなつた。比企氏の殺されたのは事實らしくもあるけれど、昨夜殺されたの歟一昨日の晩殺されたのか分らない。

やがて卯太郎は**パアカース**村へ着いた。この村は紡績會社や木挽會社があつて、村といふのは惜しいほどの大きな町だ。老紳士比企氏は是兩會社の株主である。饒舌家の**ウソツキ**卯太郎は性慾もなく、是村へ着くや否や比企老人の殺されたことを、今回は流石に自分が探損してきたやうではないが、ほんやり乎と風説のやうに話した。比企老人の名は是村て誰知らぬ者もない。それてあるから其風説話は其から其へと傳はつて、たちまちの間に大騷ぎとなつた。村の新聞は『兇漢比企氏を絞殺す』と題した號外を發し、氏の姪が仰天の餘り、今尚人事不省に陷つてゐると報じた。村中は實に鼎の沸きかへるやう。會社は株主の變死に對して弔意を表するため、特に機械の運轉を止めるのてあつた。

卯太郎は村中の騷ぐのを見て愉快で堪らない。それで廢せば可いのに村のポンプの臺の上へ攀登つて、比企老人の殺されたといふ報道は、斯くいふ卯太郎が持つてきたのであると、鼻うごめかして演說し、さらに最初から詳しく說き出さうとしたとき、**キンボールトン**村を通つて來た馬車が來た。

人々は忽ち其馬車を圍繞いた。そして比企老人の殺された模樣を聞かうと、八方からわい／＼と喚くのであつた。馬車の中には一人の辯護士と可愛らしい娘がゐたが、辯護士は比企氏の殺された摸樣が聞きたいと、しきりなく群集の叫ぶのを聞いて、馬車の窓から其顏を突出し「諸君は何を仰やるのか我輩には了解が能きんです。比企氏は決して絞殺などされやしません。我輩は辯護士でありますが比企氏から依賴されて、これから**コンチカツト**の裁判所へ參るところてす。その委任狀を比企氏自身が、昨夜の十時に現在我輩へ遞與されたのであります」と說明した。

續いて又可愛らしい娘が顏を出し「みなさん比企は私の伯父でございます」と嫣然した。村の新聞が人事不省だと報じた比企老人の姪が、このとほり達者てゐては最早疑ふ餘地がない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さて比企氏の變死一條が事實無根に極つてみると、村人の怒は是無根の報道を齎した卯太郎の上に移らざるを得ない。血氣の勞役者連は卯太郎の躰へ松脂を塗りつけやう歟、裸躰にして村中を牽ばり廻さう歟、それとも前刻得意がつて演説したポンプの水を浴せてやらうかと相談する。又村役場では渠を裁判所へ送つて辛い目を示せてやらうかとまで意氣込んだが、比企孃の執成で漸く赦されることになつたので、卯太郎は這々の躰で其場を逃出しかけたが、さるにても感心な孃さんだと回顧く途端、多くの小兒等から粘土を投げつけられ、躰中が左官の手間取のやうに泥だらけになつて、しかも其粘土の一塊が口の中へと飛込んだときは、おぼえずも不思議な面をするのであつた。

さるほどに卯太郎は其夕キンボールトン村近くへ辿り着いた。そして私設道路で規定の錢を拂ひながら、比企老人の變死の疑ひが尚霽れぬので、「どうです貴君は二三日前から比企老人に會ふまい」と探りを入れると、「いゝえ今馬に乘つて此處を通つた――そら――あすこに尚姿が見ゑる――あれが比企の且那です」と答へた。

卯太郎は合點が行かぬ。試みに騎馬の老人の跡を追つた。そして菓園の有名な大きい梨の樹近くへ來たときは、もしや比企老人の死骸がぶら下つてはゐまいかと、胸を動悸つかして夕闇に透かすのであつた。然るに是は抑も如何に梨の樹の下に、まさしく七顛八倒の苦しみをしてゐる者がある。卯太郎は怖いのも忘れて馳寄つてみると、比企氏が一人の愛蘭人の爲に首を絞められてゐる。

「汝」と卯太郎は手にしてゐた鞭で愛蘭人を擊仆し、「且那、且那、比企の且那、しつかりなさいまし」と扶け起した。

いつたい是れは如何した譯であつたかといふに、最初比企氏を殺めて金圓を强奪しやうと企んだのは三人組であつたが、一人逃げ二人逃げ、三人目の愛蘭人が三日目の晩に實行したのであつたとが後に分つた。途中で卯太郎に此事を話した怪しい者共が即ち此逃亡者である事は讀者の早く推察せらるる所であらう。

ウソツキ卯太郎は其後企比老人から、命の親と尊められ、老人から資本を貰つて大きな貰屋になつた。そして今ではウソを吐くことを全く廢めた。

夫婦の孰れが多く貞實なるか

山縣鑑湖君

（此文は有名なる英國の諷刺家アヂソンの「ヘンスベルグの圍」といふ一篇を飜案した者であります）

近頃友人某より左の面白き手紙が參りました。

拜啓、其後は御無沙汰に打過ぎ、申譯がありませぬ。

さて二三日前或貴族の宴會に招かれ出席しましたところ、來客は皆年の若い紳士や貴女で、大そう愉快でありました。食事の後、一同別室に引取り、そこで四方山の世間話がありましたが、其うちにふと話が夫婦の愛の事に移り、世の中に不實の夫の方が多いか、又不貞の妻の方が多いかといふ問題について盛に議論が起りましたところ、婦人方の味方の一紳士が自分の說を强むる爲め、ヘンスベルグの圍みについて次の物語をせられました。

昔し獨逸の國にコンラッド第三世といふ武勇すぐれ

たる君がありました、或時バヽリア國に攻め入り、其國王グーエルフアスといへるをヘンスベルグの都に圍まれたところが、バヽリア國人も暫くは支へましたけれども、やがて糧盡き刀折れ、都の陷ること遠からじと思はれました。そこで府中の婦女等はコンラッド帝に使を立て　仰ぎ願はくは我等婦女だけの生命は免させ給へ、各々持ち運び得る限りのものを携へて、來ん何日の朝、城の外に出づべければ、其節は大王海岳の恩を垂れて我等を免させ給へと嘆願に及びましたところ、帝もかよわき婦女のことなれば何程の貨財を持ち出すことを得んや、且つは何の罪もなき婦女迄も屠り殺すは武士の爲すべき業ならじと思ぼし召されて、其歎願を聞き屆けられました。やがて定めの日の朝ヘンスベルグの城門、內より開かれ、列を作りて出て來る幾隊の婦女子を見れば、思ひきや、各々其背に負へるは金銀財寶ならで、其良人でありました。コンラッド帝は之を見て大に感動し、ヘンスベルグ府の婦女が良人を思ふ情の深きを淚を流して賞でられ、直に圍を解きて、バヽリア王と和睦せられ、後大に王を寵せられました。

此物語を聞きて列席の貴女方は少なからず勝ち誇ら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れ、婦女の其夫に貞節なること斯の如し、これにても不貞の妻、不實の夫よりも多しといひ得るか、さるにても日本の男子にして、若し斯の如き折に男女地を替へたる時には、男子は其妻を背負ひて出づるや、或は此機を幸ひとして煩はしき妻の係累を避けんとするが如き事なきか、我々の良心に問ひて見よと言はれました。これに對して男子方の辯護人なる一紳士、男子の力は女子よりも強きこと數倍なれば、此事を考へても、其時若し男子が其妻を背負ひ出すことなくば大に責むべしと答へられました。かゝる雜談のうちに小生は試みに貴女方に向ひ、男子の力強ければ其折妻を背負ふて出づる傍、如何なる物品を携へて出づるならんと問ひましたところ、或貴女は氣に入りの藝妓ならんと答へられましたが、察するに其御良人は伊藤侯の如き人でありませう。又或貴女は勳章ならんと答へられましたが、思ふに其夫たる人は名譽心の強き人でありませう。其他、獵犬、書畫、骨董、書籍、盆栽等、種々の面白き答へがありました。

小生は其夜深く此事を考へて眠に就きましたが、其爲めか左に御話し致すやうな不思議な夢を見ました。

我日本の或大なる都府（名は態と申上げませぬ）が四方敵に圍まれて、今や陷るばかりの危さとなりましたから、府民は敵の大將の憐憫を求めました。すると敵の大將は前にいふヘンスベルグの圍みの時に於ける條件の他を聞屆けませぬ、即ち夫持ちの婦女に限り、物品を携へて外に出づることを許しました。因て小生は敵の陣中の小高き處に立ちて府中の婦女が如何なるものを携へて出で來るかと片唾を呑んで待つて居りました。こゝは府中の婦女が集合すべき所と定められたのでありましたが、やがて城門サツと開かれ、第一番に出て來りし婦女を見まするに、背に大きな包を負うて居りました。それからさも重さうに息を切らしながら歩いて來て、大事さうに包を地上におきましたから、小生は必ず此婦女の夫が包の中から飛び出すだらうと思つて見て居ましたところが、包を解いたのを見ると、中には御召縮緬の小袖や襦袢の丸帶等が澤山に入れてありました。第二に出て來たのは年若き婦女で、若い男を背負つて居りましたから、小生は若夫婦の情愛さもあるべしと感服しましたが、よく〳〵見ますと、豈に圖らんや其男は市村家橘で、婦人は良人を家に殘して來たのでありました。第三の婦人は大なる三毛猫を携へ、

第四は三絃、第五は櫛笄、第六は佛林狗、第七は紅葉の小說、一番可笑しかつたのは第八の甘諸で、さて其次に出て參りましたのは高利貸の女房で、金銀紙幣など一杯入れてある大なる包を背負つて來ましたが、小生に向ひ、良人はもはや棺桶に片足入れて居る程の老人でありますが、私は良人が平常生命より大事にして居たお金を持つて來ましたから、良人は定めて喜んで居りませうと申しました。次には若き息子を背負ふたる婦人が出て來ましたが、此息子は大の放蕩者なれど、母は殊に之を愛し、此馬鹿者のため良人と共に數人の末頼母しき子女を殘して來たのであるそうです。

小生が奇夢中に見ました品物の種類を一々書き立てまするど限りはありませぬ、暫くの間に小生の立ち居たる場所は一面に數千の品物を以て蔽はれ、さながら博覧會に參つたやうでありました。中にも一番多かつたのは衣服類で、次に頭の飾りの品々が多くありました。又一人の婦人は其良人が頗る輕いんてしたから、衣服の包みと共に背負つて來ましたところ、途中で持ち重りに堪へかねて、良人を落して包みだけ持つて來ました。小生は此山の如き品物の中に唯一人の夫しか見受けませんでした。此男は毎日其妻を叱り散らし、拳を用ゐぬ日は無いそうで、背負はれて來る途中でも蹴つたり打つたりして居ました。

一番奇であつたのは數人の妙齢の佳人が一人の色の黑い男を守護して來たことゝて、此幸福なる男は誰かと見れば、『家庭雜誌』記者でありました。何故こんな男を救けたのかと聞きましたところ、佳人等は『家庭雜誌』の發行を止めざるべしとの約束でつれて來たのであると答へられました。

以上癡人の夢語り、幸ひに御笑讀て乞ふ、頓首。

（枯川生申す。孟湖君の翻案の妙には眞に敬服いたします。殊に末の一段、色の黑い家庭雜誌記者のところ、恐縮やら、恐悅やら、小生には何とも知れぬ感じが起りました。然し婦人の讀者諸君に對してこゝに斷つておく事は、家庭雜誌記者は假令妙齢の佳人等に其命を救はれても、婦人に媚びるような文章は決して書かず、時としては隨分憎まれ口（勿論、アヂソンのような、或は孟湖君のような、巧みな、皮肉な、諷刺は出來ませぬけれど）を叩く事もあらうと存じます）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●世界奇聞

▲猫の國　埃及人は非常に猫を尊敬したもので、其原因を聞くに、此國には無數の穀物倉があつて鼠の害を受ける恐が多かつたので、それで猫を大切にする習慣になつたと云ふ事であるが、今其の猫の待遇法を聞くに、先づ猫の爲に病院が設けてある、次に猫が死ぬれば其屍に香油を注いで大變な儀式で葬りをする、そして其家内中は皆眉を剃りおとして忌服をしたものだそうな。今でも幾らか其れらの習慣が殘つて居て「猫の父」と呼ぶ高等官が設けてある、又カイロ市の近邊には猫の爲に毎日御馳走を備へておく建物があつて、市内の猫は勝手にソコに行つて御馳走になつて差支ない仕組になつて居るとの事。

▲世界第一の贅澤な巡査　瑞典の首府ストツクホルムの巡査は實に結構な生活をして居るが、其代り採用試驗は非常に高尚で學士と同等の學力が無ければならぬ。それで警察署の贅澤さ加減は先づ上等の倶樂部のようで、絨毯、書籍、安樂椅子、浴場、ピアノ等、一として備はらざるは無く、歌の稽古までさせるとの事。

▲紙の世の中　露西亞の一貴族は其ポトリアの領地に紙製の家を建てたが、部屋の數は十六あつて其費用は十六万圓掛かつた。それを建築した技師は石造家屋よりも永く持つと云つて居る。又那威のバーゲンにある一寺院は紙製で一千人を入れるに足る大建築である。近來は又紙製の自轉車、紙製の船の帆さへ出來る世の中になつた。

▲本當に正直な人　英國で或奇癖ある金持の老紳士が「本當に正直な人と云ふ者はドウも無いものだ」と口癖の樣に云つて居たが、毎日乘合馬車に乘つて、車掌の居る近くに座を占めて、乘合客の賃錢を取次いでやつて、又其客に釣錢を取次いでやる時に、一錢か二錢か自分の懐から出した錢を交ぜて渡して居た。そしてジッと其客に注目して見ると、大槪は餘分にあると氣が付きながら默つて其れを着服してしまふ。然るに或時、一人の少女が「車掌さん、是れだけ多過ぎます」と云つて銅貨を返した。老紳士之を見て大きに喜び、竊に其少女の跡をつけて其人柄などを聞糺したが、程なく老紳士の死んだ跡で、其遺産の全部は其少女に讓りわたされて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一口ばなし

▲細君の政略

或細君、新らしい半襟が一つ欲しくなつたので御亭主に向ひ「あなた、私帯が一筋ほしいのですがね、マア見て下さい、今してるのはコンナになつてしまつたのですもの」と切りだした。

御亭主は震へあがつて「駄目だ、駄目だ、そんな金があるものか。半襟の一掛も欲しいと云ふなら私も反對しやせんが、帯なんて迚も話にならんぢや無いか」

細君占めたりと思ふ心を色にも見せず「そうですかねえ。ぢやマア仕方が無いからセメテ半襟でも一掛買つて下さいな。

▲嫌ひあつた夫婦

お梅「オヤまあソウですか、アノお菊さんと吉田さんと一しよになつたんですか。そしてマア二人とも好きあつて居たんてしようか。

お松「ナニ好きあふものですか。あれは嫌ひあつたからてすよ。

お梅「おかしいぢやありませんか。嫌ひあつたものがドウして一しよになるんてしよう。

お松「それはお前さん斯うさ。お菊さんは年を取つて獨身で居るのがお嫌ひだし、吉田さんは又貧乏して居るのがお嫌ひだからさ。

▲儉約家と醫者

儉約家「先生、此間いたゞきましたアノ咳のお藥はドーモあんまり感心いたしません。

醫者「ハヽア それはお氣の毒。餘り利き目が見えませんてしたかね。

儉約家「ナニ利くにや利きましたがね。無駄ですもの。

醫者「ヘヽエ、無駄、それは又ドウして?

儉約家「だつて先生、アノお藥は半分も呑まない中に咳は疾うに治つてしまつて、半分以上も跡に殘つたのですもの。

▲結婚後の問答

男「ナニ?お前には財産が少しも無いのだつて?でもお前、幾度か〳〵ソウ云つたぢや無いか、人が皆私の財産を目的に結婚を申し込むので厭になつてしまふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ナンテ。

女「えゝ、ソウですとも。あなたは又、幾度か〳〵ソウ云つたぢやありませんか、私が假令着のみ着のまゝの者であつても少しも構はないナンテ。だから私ホントに着のみ着のまゝなんですわ。

▲細君の手綱

甲「小山が細君を貰つたと云ふがサゾ尻に敷かれて居る事だらうね。

乙「デモあの男は平生、女なんぞ出しやばらす者ては無い、ナンテ云つてたぢや無いか。

丙「だからさ、彼奴今でも先に立つて威張つて居らアね。只、細君が後に居てチヤアンと手綱を取つて居るだけの事さ。

▲唯つた一つ上らないもの

細　君「物價が皆上りましたよね。是れぢやホントにやりきれやしない。

御亭主「皆でも無いさ。

細　君「皆でも無いんですツて？ぢやマア何が上らないか、上らないものを一つ云つて御覽なさい。

御亭主「よし、私の月給はドウだ。

▲八の割方

教　師「八を二つに割れば幾つになりますか。

富太郎「先生、縱に割るのですか、横に割るのですか。

教　師「縱に割るの、横に割るのと云ふ事がありますか。

富太郎「でも先生、8を横に割れば0になり、縱に割れば3になります。

▲察しの悪い御亭主

細　君「私の躰には少し氣候の變化が必要だとお醫者樣が云つて居ます。

御亭主「そうか、丁度好い鹽梅だ。雨の降りそうな空あひになつて來た。

▲辻占煎餅の分け方

母　親「福坊、お前今の辻占煎餅を菊ちやんにも分けておやりだつたらうね。

福坊「あゝ分けたよ。煎餅を僕が食べて辻占を菊ちやんに與つたの。

▲「まだ見ぬ親」と云ふのは「家庭小説」と銘を打たれて去るころ讀賣新聞に載せられて、大變評判が善かつたので、今度一冊の本にして發行せられた者である。元は**フランス**に有名の作で、それを五來素川君が短く縮めて譯したのであるが、話の筋も面白く、譯筆も頗る自在で、誠に善き家庭の讀物である。それで此にザット其梗概（荒筋）を記しておく。猶心ある人々は本書についで十分に御味ひあれ。

先づ**フランス**の關谷新田と云ふ處にお文と云ふ善き女が住んで居た。此お文の手に育てられて成長した太一と云ふ親知らずの子があつた。お文の亭主は**パリ**に出て働いて居たが、大怪我をして病院にはいつたので、お文と太一とはトウ〳〵「乳母とも朋友とも思つ」て居た山羊まで賣つてしまふ事になつた。其中、亭主は**パリ**から戻つて來て、貧乏の苦しまぎれにお文をだまして、今度は太一を犬使ひの嵐一齋と云ふ老人に賣つてしまつた。

此嵐一齋と云ふは、今こそ犬使ひに落ちはふれど、元は**イタリー**、**フランス**に有名な音樂家で、一時世上に持て囃された人であるが、それがフイと喉を痛めて音樂界から退いて後は、昔の名に耻ぢて全く跡を晦まし、太夫さんと稱する猿一疋と、白妙丸（通稱**シロ**）、黑鐵丸（通稱**クロ**）、小玉孃（通稱**タマ**）と云ふ三疋の犬とを飼ひならして、それに色々な藝を仕込んで、旅から旅に大道の興行をして歩いて居たのである。

太一は悲しい別れをして、此老人に連れられて行つたが、老人が思ひの外に親切であるのと、間もなく**シロ**と親友になつて其「頸玉に犇とばかり抱きつき、冷い鼻先に接吻」するほどになつたのとで、やうやくそれらに慰められて諸方を興行しまはつて居た。

それからアチコチで色々な難義にも遇つたが、其中にも太一は師匠一齋から種々の敎訓をも受け、讀み書きの業をも授かり、賤しい稼業の間に氣高い品性を養はれた。

然るに、或冬の夜の事、吹雪の中に杣小屋に一宿した時、狼に襲はれて**クロ**と**タマ**とを失ひ、おまけに太夫さんの猿にまで風を引かせて、それも次の宿で「陸軍中將の軍服を着け」たまゝでトウ〳〵死なせてしまつたのである。

それから嵐一齋の運が傾いて、一齋と太一とシロと三人でパリの都にはいつた時には、どうにも斯うにも仕方が無くなつたが、それでも一齋老人は決して只は人の憐みを乞はず、とう〳〵夜ふけて或植木屋の門前の藁の中に眠つたまゝ、寒さと饑とで死んでしまつた。太一はシロに暖められて纔に命を取止めたが、此時警察の調べに依つて、始めて師匠の素性を知り、それで「今迄の事はスッカリ合點が行つた樣なもの〻」「マア嵐一齋と云ふ人は、それ程の傑人であつたのであらうか」「如何に憐深き伶人の運命ぞと、子供ながらも覺えず涙ぐんだのである」

それから太一は萬吉と云ふ相棒を得て、シロと三人で太一一座を組み、專ら音樂でもつて興行をしあるいたが、今度は又案外に好結果を得て、大分に金も溜つて來た。そこで太一は四年ぶりに、「八年の養育の恩」のある關谷新田の「母樣に會ひに行かうと決心した。それには何か土産が無ければならぬがと考へて、「ハタと心に浮んだのは……泣く〳〵母樣が賣拂つた」山羊の事。それから色々苦辛してトウ〳〵立派な山羊を一疋買つて、不意に關谷新田に尋ねて行つて、「おやマアどうしよう、太一ぢや無いか知ら」「おう太一！では矢張りお前だつたのかい、まあ〳〵〳〵」とお文を喜ばせた。

丁度其時、太一の眞の母親が太一を探して居ると云ふ事であつたが、フト或貴婦人（旅興行の途中で世話になつて、大變に慕はしく思つて居た人）に回りあつて見れば、それが即ち太一の眞の母親であつて、太一は生れて僅に五六個月の頃、家督相續の爭ひの爲に、叔父に當る惡者の爲に盜み出されて、パリの町に棄てられた者であると始めて知れた。それから太一は春日武雄と云ふ子爵になつて、或日「太一時代の恩人を一室に集め」て「悴武滿の洗禮の祝」の宴を催した。「やがて‥‥‥饗宴の濟むを機會に」武雄（太一）は「萬吉と一所に樂器を取り出して、昔の歌を唄ひはじめた。」すると「今迄長椅子の上に横になつて居た年取つたシロが、昔の通りに前足で立ち上り、帽子を啣えて一座を廻り始めた。是れは金を集めて歩くのである。それから武雄は「唯今シロが皆樣から戴きました此金は、此度亡師嵐一齋の紀念の爲めに大道音樂者收容の目的を以て巴里の日蔭町へ建てまする嵐音樂學校の資金に致すので御座います」すと挨拶に及んだのが此話の大團圓。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

匆々一筆

▲青葉生　よりの御相談、十一人の家内に長男たる自分ばかり基督信者であるが、仝じ信者の婦人を妻に望ましけれど、家内の仝意が得がたいとの事。例の家族制度の弊に苦まるゝ所、お氣の毒の至。其點については、よく〳〵御兩親其他に意中を陳じて、獨立の生活を營み、獨立の家を作られんとを希望致す。然し細君は必すしも仝じ信者で無くとも善さゝうに思はれる。何となれば、それは我が誠を以つて後々いかようとも感化する事が出來る筈である故。

▲零川生　より前々號天文の記事につき御注意感謝の至。其中にて「天の牛球には三千づゝくらゐ肉眼に入るべき星あり、併し……實際目に見ゆるものは僅に二千位に過ぎず」と云ふ一節を借用して訂正かた〴〵此に記しておきます。

▲瀧口生　より「私は活版工でございますが……私が働いて居りますれば細々ながらも家族四人生活して參られますが、私が徴兵の爲め入營でも致しますれば忽ち糊口に差支へねはなりません、私は毎日夫のみ心配で安き心地もございません……到底私は生活の出來ない家族を後に殘して入營する事は出來ません、アゝ何とか好い工夫のない者でせうか」との御相談。小生は之を讀んで殆んど斷腸の思ひを致しました。然し小生は今、瀧口生に向つて何等の「好い工夫」をも呈する事は出來ませぬ。斯くの如き悲慘なる事情には目をつぶつておいて、只廿何万の陸軍に誇るのが今の世の人の心であります。社會主義に依つて貧乏と戰爭とを除き去るまでは、斯くの如き悲慘は決して無くなる者ではありませぬ。小生は今瀧口生を慰めるに足るほどの言葉を持ちませぬが、瀧口生若し終に止むを得ずして入營せられるならば、何卒軍隊中に社會主義の思想を傳播して、少しも早く此社會を救ふ事に勉められるよう、今は只それのみを希望しておきます。

▲石見氏　より「小生は本年廿八歳に相成候處、昨年一月妻は病氣の爲め死去致し其時五歳と生後十一ヶ月との二兒有之、致し方なく乳母を以て養育致し候へども無資産の事ゆゑ乳母を返し度……今後の方針は如何致し候はゞ樂しき家庭を造る事を得申すべきや」「家族は母(五十餘歳)一人のみに有之」との御相談、是れ實に困難なる問題であります。然し、幼き人も最早三歳なれは乳母を返すに何の差支も無き筈、一時の困難を忍びて一日も早く斷然と返すものは返してしまひ、扨其跡は、母御のあることこそ幸ひ、其手を借りて養育する事とし、其中ゆる〳〵と新なる配偶者を求めたまへ。此場合、新なる配偶者を求むるに若し輕卒の事を爲さは、それこそ貴下及び二兒の爲め生涯の不幸なれは、此人こそはと深く信任し得る婦人を得る迄は決して再婚の心を起さぬが肝腎と考へられます。差しあたり獨身の不便と不安とは是れ實に致方なき事として天命に服從するの外はありますまい。

▲堺宛の郵便物　は左の通りの肩書に願ひます。東京市四谷角筈七三八

▲轉居の御報知　には何卒新舊の御住所を明瞭に御記載あらんとを乞ふ。

▲本社取次書籍　以外の出版物に對し本社に御注文あるは甚だ迷惑の次第につき今後は御免を乞ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

萬朝報記者 幸徳秋水著

社會主義神髓

定價三十錢郵税六錢

第二版發賣

▲大阪朝日評 叙述整然として繁簡宜きを得、加ふるに著者の雄麗なる文章を以てしたれば社會主義の大綱を説く者の隨一也

▲毎日新聞評 一貫せる議論の底に情熱炎々たるを見る、以て一大文學と云ふべく、又一大演説と許すべし

發兌元 京橋區弓町二十一番地 朝報社

大賣捌 萬賣舍 東海堂 服部 東京堂 上甲屋 扶桑堂

河西璞著

應用理科 家政心得草

婦女文庫第一編

紙質精撰躰裁高尚 定價金參拾錢
紙數二百十四頁 郵税四錢

衣服寢具飲食住居器具燈火爐火衞生美貌法等日常卑近の事項を促へ來りて、一通りの學理を説き、零砕なる諸般の注意と有益なる實地應用の方法とを懇示す材料は精確にして、文章は極めて平易なり以て家政の益友たるべく學生の參考書たり新世帯の良案内たるべし。

發行所 東京日本橋區小舟町二丁目一番地 獨立評論社

新刊消夏の讀物

池田秋旻著

女子の王國

定價四十錢　郵税六錢

婦人の任務　議論は穩健
實力の養成　說明は親切
女權の擴張　文章は平易
家庭の改良　趣味は豐富

發行所　東京麻布竹谷町一　南風社
大賣捌　東京神田表神保町　東京堂

朝報社有志

講演集

第壹輯
藤村操の死に就て　黒岩周六君
禁酒禁煙談　中島氣峪君
富と德　內村鑑三君

第貳輯
建築と道德　山縣五十雄君
サン、シモンの傳　幸德傳次郎君
社會主義と婦人（社外）　木下尚江君

第參輯（八月十五日發行）以下續々刊行

▲一部定價十錢、郵税壹錢、十部前金郵税共壹圓
二十部前金郵税共壹圓九十錢

發行所　東京日本橋區橋町三丁目十一番地　萬成社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

堺枯川著

家庭の新風味

全六冊合本

著者は此書が多くの新婚の人に讀まれんことを望む。
著者は此書が多くの將に結婚せんとする人に讀まれんことを望む。
著者は又此書が多くの中年の人及び老年の人に讀まれんことを望む。
要するに著者は此書が多くの家庭文庫に備へられんことを望む。

赤表紙合本全一册　割引價八十錢　郵税八錢

取次所　東京市京橋區新港町一丁目十七番地　由分社

●家庭雜誌目錄

▲第壹號（四月分）

▲本紙の特色▲我輩の根本思想▲動物虐待防止會▲ユトピアの話▲イソプ教訓談▲家庭文庫の必要▲古書新書▲娘の學ぶべき事▲僕にもオバアさんが欲しい（讀切小說）▲倫敦の日本料理▲編輯及發行事情等

▲第貳號（五月分）

▲茨の花（漫吟）▲子なき人に與ふる書▲老人問題▲家庭の消息▲海豹と人との交（書入）▲梟の一家族（滑稽畫）▲偶感▲夕日岡園遊會の記▲菊坊のお話▲匆々一筆等

▲第參號（六月分）

▲新天地（漫吟）▲隅田川邊の好家庭▲ワシントン及其母（肖像）▲鼠の失策（滑稽畫）▲偶感▲讀者の顧問▲樂しき生活▲結婚離婚の統計▲天文の話▲家庭の消息▲匆々一筆等

▲第四號（七月分）

▲三つ子の感化力（讀切小說）▲不二彥（肖像）▲柿山伏（狂言）▲猪とクヅ鹿（滑稽畫）▲偶感▲讀者の顧問▲樂しき生活▲加藤邸晩餐會の記▲倫敦雜話▲家庭文庫▲匆々一筆等

初號より取揃へ御注文に應ず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第五號
（明治卅六年四月二日第三種郵便物認可）
明治三十六年八月二日發行

大好評忽再版

福音新報評●美的趣味は充分に精神上の益大なり

讀賣記者 法學士 五來素川譯 梶田半古畫

家庭小說 未だ見ぬ親

菊版全一冊紙數三百四十頁精巧美麗彩色口繪特製正價金六拾五錢並製正價金五拾錢郵稅各金拾錢

此書原文題して「サン、フェミーユ」（家なし子）と云ふ、佛の文豪エクトル、マロー氏の傑作なり、

可憐の一孤兒未見の親を尋ねて天下を流浪す、親なりと信ぜしもの親にあらず、親ならずと信ぜしもの即ち眞の親なり、人生の集散離合描き來つて覺えず人をして涙を振はしむ、然かも悽愴悲慘の光景中交ゆるに、義人、美女、忠犬、老猿の類を以てし、變轉の妙殆んと應接に暇あらざらしむ、此書**趣味の清新高雅**を以て佛國に鳴り、出版以來未た數年ならずして既に**百五拾版を重ねたり**、前きに素川君の靈腕を借りて「讀賣」紙上に紹介せらる、譯文平易にして雅麗、流暢にして精緻情の趣く處筆亦た從ひ、實に些の斧痕なし、宜なる哉其老幼を問はず深かく讀者の心絃に觸れ、廣く江湖の喝采を博し得たるや、近頃四方より一卷として家庭の珍とせんとを求むる者甚た多し、依て今般譯者に諮り魯魚の誤を正し更に筆致に潤色を加えて普ねく天下に頒たんとす、少年讀むべし、少女讀むべし、學生讀むべし、勞働者讀むべし、子をもてる一家の母尤も讀むべし、寔に是れ好個の家庭的贈物！

發行所 東京上野廣小路通 電話下谷一五〇二 東文館

報知新聞評●少くとも上流の社會には洩なく備へしむべし

家庭の贈物●消夏の讀物